

あとがき

我が国の体育・スポーツは、歩んできたスポーツ大国への道が一応の成果を上げ、オリンピックのメダル獲得の国別順位でも常に上位を占めるまでに成長を遂げた。そして同時に、スポーツのもつ優れた機能を他分野に活用する試みが活発化し、成人や高齢者の肥満などの生活習慣病の予防の役割までを担う時代がやってきた。これらは嘉納治五郎先生を祖とする明治以降の先輩体育指導者諸氏の普及・啓発の努力の賜物であり、尊敬と感謝をささげたい。

本書は、スポーツ活動によって生命や健康を損ない、苦痛を負った人々がいたことを繰り返して述べ、運動する人々の不健康を告発する異例の書の体裁をとって、場合によってそれは針小棒大とも受け取られかねない表現になっているかもしれない。一応の成果をあげたときは、そこまでの道のりを冷静に振り返る好機である。光には影が付き物であり、輝いた人々の陰に色々な理由によって輝くことができなかつた多数の人々がいるであろうことは想像に難くない。輝くことができなかつた人々を襲つたであろうスポーツ傷害・障害に焦点を当てることによって描き出されてくる事柄は、次の数十年間の体育・スポーツ指導者の活動に何らかの示唆を与えることができると考えている。スポーツ傷害・障害によってスポーツの道を断念せざる

を得なかった人々を半数に減らすことができたならば、この国はスポーツ超大国に向かう階段に足をかけることができるかもしれない。少子化は、各分野による18歳人口の奪い合いを加速してくることは間違いない。これまでのような消耗戦では、スポーツ超大国どころかその担い手を完全に失うことになりかねない。

体育・スポーツ指導は、この国に根付いてまだ100年の時を経たに過ぎない未熟な分野である。編者が目にしてきた数十年間だけに限っても、体育・スポーツ界は、各界の協力と国民の支持を得て大きな発展を遂げた。しかし、本書の全編を通じて指摘してきたように、この発展が衛生学の視点でしか見通すことができない「陰」を帯びていたことを、我が国の体育・スポーツ指導者に伝えることができたと思っている。今、「陰」となってしまった幾人かの若者たちとその両親の面影とが編者の胸に去来している。私たちは、「知らなかった」と言い逃れをすることのない成熟した分野の構築に向かって歩いていく。

本書の提案を暖かく受け止め、粗稿を審査していただいた筑波大学出版会の編集委員会と出版の実務を担当していただいた方々に衷心よりお礼を申し上げる。

平成21年4月1日 自宅にて

編者 田神 一美